

寺 報

真宗大谷派松寺永福寺

平成 16 年 10 月 1 日 発行

第 28 号

発行所

富山市梅沢町3丁目1-6

真宗大谷派 松寺永福寺

電 話 (076) 423-1848

発行人 長 間 寿

松寺だより



<画と文>福光町東町 山村洋子さんの絵手紙から

慈光のもと各位には為法ますます
すご精進のこと心からお慶び申し
上げます。平素より教化事業の推
進また宗門の護持に、一方ならぬ
ご尽力を賜っておりますことに對
し厚く御礼申し上げます。

さてこのたび宗祖親鸞聖人七百
五十回御遠忌並びに真宗本廟両堂
等の御修復に向けた総計
画及び総予算が確定し、
いよいよ宗門あげてこれ
らの大專業完遂に向けた
取り組みを始める運びと
なりました。

ご存じのとおり真宗本
廟（東本願寺）は親鸞聖
人がお亡くなりになられ
てから満十年にあたる一
二七二年（文永九年）聖
人の遺弟があい図って大
谷の地に「廟堂」を建立
したことに始まります。

爾來御真影の前に身を置き、聖人
が顕らかにされた本願念仏の教え
に出遇われた幾多の人々の信心に
よって護持伝承されてまいりまし
た。

ことに現在の両堂は一八六四（元
治九）年の蛤御門の変によって焼
失し茫然自失するなかで『法義相
続・本廟護持』を本義とする『講』
が結成され、親鸞聖人を宗祖と仰

ぐ門徒のみならず、一般市民から
も志が寄せられて一八九五年（明
治二十八年）に再建が果たされた
ものであります。私たちが真に誇
りとするところはこの幾度となく
繰り返された苦難をうち超え、市
民社会にまで大きな影響を与えな
がら、ついに完成した真宗本廟に

たことはご存知の通りであります。
また、時あたかも二〇一一年（平
成二十三年）に宗祖親鸞聖人の七
百五十回御遠忌をお迎えいたしま
す。この時にあたって先の宗祖親
鸞聖人七百回御遠忌に誕生した真
宗同朋会運動の点検も含めて次世
代に本願念仏の教えを確実にお伝

真宗大谷派（東本願寺）

宗務総長からの手紙

熊谷 宗恵

観る幾百万門徒の信力であります。

ところで近年、宗門ではその先
達のご苦勞によって再建された両
堂を確かに未来にお届けしようと
願ひ、百余年を経て初めての大き
な点検調査を行った結果、凍害な
どによる屋根瓦の破損、経年によ
る木部の損傷や腐朽などまことに
憂慮すべき事態が判明し、御修復
への声が増しに大きくなつてき

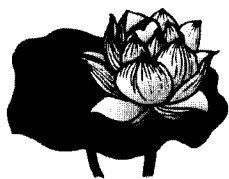
えできるような宗門の見直しも志
向すべき意義深い時を迎えており
ます。そしてこれらの事業が宗門
人にとって真に意義深い取り組み
となるためには、わたしども一人
ひとりひとりが「どういう姿勢で
宗祖の御遠忌をお迎えるのか」
また「私たちにどうして真宗本廟と
は何か」という問いに向き合うこ
とが求められていると思えてなり

ません。

従つてこのたびの大專業を踏ま
えた長期的な総計画として、宗祖
親鸞聖人の御遠忌を中心に据えて、
御遠忌前には御影堂を、御遠忌厳
修の後には阿弥陀堂と御影堂門を、
さらには同朋会館など諸施設改築
などの課題も明らかにしながら、
単なる大型管轄事業に終わること
のないよう事業の継続と教化の連
続性を願ひ、計画を構築いたして
おります。ただこうした宗門の將
来を展望した計画を完遂するため
には、多額の財源が必要となるこ
とであります。

皆様方にはこれから長期にわたつ
て御懇志をお願いいたすことです
が、何卒宗祖親鸞聖人七百五十回
御遠忌・真宗本廟両堂等御修復事
業の趣旨をご理解いただき、宗門
再生への格別のご協力を賜ります
よう、切にお願ひ申し上げます。
敬具

二〇〇三年八月



平成13年お盆特別法話抄出

城端町大福寺住職 太田浩史師

なぜ松寺というのか(3)

◆真言から浄土へ

神戸の浄定法師の開かれたお寺が、はじめは海王寺または海王院という、いかにも山伏っぽい名前が、いつの間にか「皆往院」という名前に変わっているのです。この言葉は善導大師の「謗法闡提 回心皆往」に基づいています。つまり、大きな山岳信仰のネットワークが、だんだん浄土という部分に関心をひかれていくという流れが、なんとなく理解できると思います。まさに医王山信仰圏は、そういう状況にあったわけですね。

ですから、後に綽如上人や蓮如上人の教化と次第に結びついていって真宗にかわっていくのです。県下の多くのお寺が、もとは真言宗だったとか天台宗だったとかという言い伝えをもっていますが、それはもともと立派な七堂伽藍をもったお寺であったということではなく、医王山や立山で修行していた山伏たちが、修行の中でだんだん浄土に引かれていくが、どうしてよいか分からない。そんなときに蓮如上人の教えに出会って、なるほどということになって山伏をやめて真宗の道場になったという寺が非常に多いのです。で、そういうことがどうして行われていったか、何が中心でそういうことが成り立っていったかということを考えてみたい。

◆開基・玄永蓮真

このお寺がその昔奈良時代に始まり、平安時代に一世を風靡した皆往院というお寺が前身になっておいて、皆往院がまた「松寺」ともいわれ、浄土真宗に変わった。これは第5代の綽如上人から第8代の蓮如上人に至る一連のご努力の結果として、変わっていくわけですが、しかし、そこで深く関わっていると思われる一人の大切な人物がいる。このことはあまり真宗史にもいわれていないことなのですが、玄永蓮真というお方がポイントになるわけです。

玄永蓮真というお方はどういう人か。『本願寺作法次第』という書物があります。これは実悟上人と申しまして蓮如上人が80歳近くに生まれたお子です。織田信長の時代まで生きておられて、95歳で亡くなっておられる。このお方が実はいろんなことを、まめに人から聞いたことを一杯書き残しておられる。この人がおられなかったら浄土真宗といっても訳が分からないことになっていたかもしれない。それによると玄永蓮真というお方は、北国の一家衆の中でも、絶大な影響力をもっておられたことが伺われます。

あとがき

◆ 昨年の冷夏に比べこのほか厳しい暑さでしたが、お盆を迎え急に涼しくなりました。被害者そのまま被害者であり、加害者がそのまま被害者であるという地球温暖化の危機をもたらし先進国のわれわれの責任が問われています。◆ 三面にご報告させていただきましたが、ご参詣用のトイレと厨房の改修工事、そして隣接地の購入による駐車場の新設工事が立派に完成をいたしました。再三にわたり、尊い浄財を賜りましたこと、厚く御礼申し上げます。寺門の未来の活動に、明るい展望が開かれたこと、まことに心強い限りに存じます。ありがとうございます。

◆ イラク戦争をはじめとして、世界各地で痛ましい戦禍が絶えません。

平和とは何だろうかと

敵(かたき)と共に生きられるそんな世界ではないかと

と、松任の浅田正作さんが念仏詩集「続／骨道を行く」で喝破されています。平和は人類の悲願です。平和を願わない人はいないのに、現実には悲しい争いが絶えません。家庭も同じです。◆ 平和の「和」は調和を表わします。それを「バラバラでいっしょ、差異をみとめる世界の発見」というテーマで大谷派は表現しました。いずれも仏教の課題である、浄土つまり如来の大悲が働く領域の開かれることが、平和を実現するキーワードといえましょう。仏教の世界観が広まりますように。(住職記)